

三河アララギ

平成二十六年

七月号

第六十一卷 第七号



ニューヨーク日記(93) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

March 7, 2014 : The Armory Show 2014

Blue Shoe Diaries



毎年やるコンテンポラリー&モダンアートショー、The Armory、今年もちょっと観てきました! アートの世界で皆どんなことに影響されてどんな作品が出来ているかを見るのが面白い。でも結局ダリとかの作品見るとそれが一番印象に残るのよね〜何故かな?

The Armory show is here! It's fun to check them out once a year to get a feel of what kind of things and events artists are getting influenced or inspired by. Somehow, though, the pieces that still leave the biggest impression on me are from artists like Dalí. Like this piece (which is just one portion of the entire piece).

目次

第六十一卷第七号(通卷七二七号)

表紙 西瓜	今泉 由利 (1)	コバルトブルー	小野可南子 (28)
ニューヨーク日記(93)	Blue Shoe (2)	上野記行を辿る	夏目 勝弘 (29)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	(4)	地球こそ	阿部 淑子 (30)
歌集「スモン」	大須賀寿恵 (5)	妻の傍ら	白井 信昭 (30)
君影草	岡本八千代 (6)	かくれ家	秋山 逸穂 (31)
抹香	今泉 由利 (7)	現代学生百人一首	東洋大学 (31)
面影	弓谷 久子 (8)	『ことよせ』	いーはとぶ (32)
車窓より	青木 玉枝 (9)	『俳句』	(33)
砥鹿の祭り	内藤 志げ (10)	私の一首	(34)
交通事故	林 伊佐子 (11)		(35)
大丈夫	安藤 和代 (12)		(36)
蕾もちたり	遠藤 脩子 (13)		(37)
そのよろこびも	足立 晴代 (14)		(38)
熊野の長藤	鈴木 孝雄 (15)		(39)
大きな蝸牛	胃甲 節子 (16)	ある自然科学者の手記(26)	大橋 望彦 (38)
桐の花	富岡 和子 (17)	絹の話(44)	今泉 雅勝 (40)
共に生きる道	伊藤 忠男 (18)	物理学者と詩歌の世界(54)	内藤 志げ (37)
ブランコ	清澤 範子 (19)	短歌に詠まれた茂吉	富岡 和子 (37)
フィッシャーと筋無力症	近藤 映子 (20)	楽しい時間(20)	鈴木 孝雄 (36)
梅鉢草	半田うめ子 (21)	上野記行	富岡 和子 (37)
思ひ出	小柳千美子 (22)	「水魚」のことから(162)	杉浦恵美子 (36)
カントウ蒲公英	森岡 陽子 (23)	『歴代天皇御製歌』(二十六)	鈴木 孝雄 (36)
田植	伊与田広子 (24)	ことのはスケッチ(427)	富岡 和子 (37)
気がつけば	杉浦恵美子 (25)	編集室だより(二〇一四年五月)	鈴木 孝雄 (36)
波の上を	平松 裕子 (26)	和菓子街道(93)	富岡 和子 (37)
ほほえみかくる	山口千恵子 (27)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	大橋 望彦 (38)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

濃緑のそよぎ眩まぶしく輝けり読むもの置かずけふ横たはる

P 1 1 1

今年竹となるまへにして撓まねばなびく篁ぬき出でて立つ

P 1 1 5

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

長き長き廊下に一つ天窓ありあたたかくなりし光を透す

山積みに捨てられしキャベツ花咲けり渥美神戸は校区あらそふ

朝よりの雨に蹠の痛みきつ毛布を敷きて椅子に坐りぬ

君影草

蒲郡 岡本八千代

君ら夫妻来たりて植ゑてくだされしスズランの花君影草咲きたり

君影草の今年の花茎やや長く白花段々に小鈴の如し

われの事二つの事のすぎゆきて今朝は佇ずむ卯の花の処

卯の花の処に寄りて君と話したゞ今今の戯たわいなきことを

葱の花未いまだ幼なき坊主二つみつけて愛かなし娘らに似て

手の届く枝に熟なりたる金柑のをちこちの黄実もぎとる今朝よ

金柑に「お前は実酔い皮うまい」などつつぶやき己の可笑し

初夏はつの光を背せなに感じつつ外井戸の水に庖丁研ぎをり

われの研ぐ庖丁に時々初夏の光は銀に輝きひかる

先生の「笑ひカワセミの」色紙飾る吾も静かにひとり笑ひして

抹香

東京 今泉 由利

さりげなくおほきサポートいただきぬ今抹香を額ぬかにかかぐる

ふつくらと実るもみじの時は来ぬいづれいづこに根付きかゆかむ

紫の素質をもてるつゆくさに導かれゆく日野の散策

みかんの葉ひとつくるくる回しつつ水は流るる日野の用水

アララギの常緑緑に若葉萌え継ぎゆくことを心に誓う

今様の顔立ちに彫るわが地蔵古りし地蔵の里をゆきゆく

正月に赤実とならむ万両の白白小花そ反り返りかえ咲く

美しい世に美しき画像にて私の脳のすこやかにあり

ビワの木にビワの実稔りビワの木に登りいたりき日がな一日

麻ひもの結びてありぬ石一つこより先へ入りてはゆかぬ

面影

豊川 弓谷 久子

二日続きの雨上がりたりさっぱりと心も軽し今日より五月

お裾分けしたしの筈分けもちて子は親友を訪ね行きをり

頼まれしシャツのポケット直しをりなす事あるは有難きこと

下駄ひとつ贈らざりしよ我は母に母を憶ひて今日は過ぎむ

玄関にカーネーションの一鉢が置かれてゐたり我が留守の間に

誰が人の心遣いかカーネーションの蕾豊かなこの一鉢は

屋根上に蓬と菖蒲を投げ上げし父の面影五月の五日

入浴剤に事の足りれば風呂の湯に菖蒲浮かべる事無くなりぬ

潮音寺に白蓮の歌碑訪ひ行きし日を思ひ出す朝のドラマに

早春より聞き馴れし声鶯の声透り来る朝の我が庭

車窓より

新城 青木玉枝

買物ツアー月一度の楽しみに財布手に持ちいそいそ車に
車窓よりみゆる山並五月晴れ青葉若葉のみどりが映ゆる
店内を車椅子に押されつつ久し振りのめぐりは嬉しき
買物は何より楽しひと日にて棚に並べる板チョコを先づ
軒の巢へ去りしつばめも帰り来て子つばめ連れて舞ひ舞ひており
門の外体操服の小学生元気に下校の列が続くを
週二度のデーサービスは施設とは又違ふ安らに心なごめり
関西では見られぬ花の多くして山里に見るめづらしき花ばな
暫らくを花にみとれて立つわれに優しく教へて共に立ちくるる
山里に季の流れの早く過ぐ海辺に立ちて波音ききたし

砥鹿の祭り

豊川 内藤 志げ

沿う道に低く小さくそばとあり友の勧めるそば屋は此処か

篋の靡きの上をつばくらめ点にも見ゆる羽撃も見ゆ

乱れ飛ぶ燕の数多藪の上廊下の椅子に飽かずるにけり

当古の畑二反歩ほどを農協の集積計画に耕作を任す

庭に散る竹の紅葉はふわふわとうづを巻きつつ作業場の奥に

東風吹けば竹の紅葉が西風吹けば木々黄葉がわがさ庭辺に

ブラウスにカーネーションに手巻ずし三人それぞれ其其がよし

庭隅の木下一面に黄の色に金柑落す今日の西風

何願う思いはなくも祭り日は砥鹿神社に一人お参り

玉一つ賽銭箱に落し入れ何願うなく砥鹿の祭り日

交通事故

岡崎 林 伊 佐 子

救急車にのりて痛むよ左足ことの事態を孫が語りぬ

吾を待つ形成外科医にかこまれて夕近きころ手術を終へぬ

軽傷ですみて夕餉の支度する老いてもわれに休む暇なし

二週間すぎて畑の仕事する揚羽二羽きて飽くなく遊ぶ

豌豆を摘みたる葉陰に潜みゐる天道虫もいとしく思ふ

犬ふぐり瑠璃に群れ咲く野菜畑雑草なれど惜しみつつ抜く

葉を開く蕨の群れに風ありてこの山道を越ゆる人なし

畑より帰りてとりこむ洗濯物三世帯といふ温もりが好き

休日は夫と憩ひし廃屋に老いて楽しむ二人の時間

馬鈴薯の紫の花と蒲公英の花を束ねて厨に飾る

大丈夫

豊川 安藤 和代

遠き日に子の奏いたハーモニカ引き出しに今ポツンと残る
帰り遅き五十の息子を案ずれば孫が寄り来て大丈夫と言ふ
直売所に友の名札のキャベツあり両手に重く二玉を持つ
咳く吾を案づる夫の背も丸し温き茶すすりて咳をこらえる
階段を登り下りするそれだけで褒めてもらうる齡となりたり
薬師寺の祭りは楽し御朱印を額に受けぬ元気わきくる
鉄塔囲む鉄柵に昼顔一本が人恋ふように小さく開く
金箔のはげゆく亡母の針箱を大切にせし吾も老いたり
はつ夏の風さわやかに園庭の幼の声の響き渡りて
保母職を辞して二十年幼等と遊びし夢に今朝も目覚むる

蕾もちたり

蒲郡 遠藤 脩子

木の椅子は痛いよこちらへとソファアの軀が声かけくるる

CDの校正終へて暫くはTさんの声耳にこだます

イタリアはポプラの綿毛が凄まじいと遙かラジオの海外ニュース

破れ繕ふ手を止め見入りぬ極寒の映像確かに幻日・幻月

わが庭に子兎二羽が迷ひきて飼主知れるまで我もウロウロ

ホッホーゴロスケホーとくぐもる声でフクロウは鳴くわが里山の夜

終につひにわがユスラウメの赤き丸実は鶉の番に食べ尽くされぬ

露を刈りキャラブキつくるは初夏のわが楽しみの作業でありしを

ルドベキアの大株分けて地に放つ八株がみな蕾もちたり

縦書きの二百字詰の原稿用紙十冊求めぬ勢い付きて

そのよろこびも 東京 足立晴代

薫風に舞ひ泳ぐ鯉雄々と樹々の緑の輝きと共に

親子連れ続く休みにのびくとさゞめく声の樂しかりけり

人の命の尊さを深く思いて日々重ね今ある吾れの幸を

人の喜びよろこびてそのよろこびも吾のよろこび

淡き陽ざしの花影に紅蘭の濃き色映えて生々と

五月晴れ緑の紅葉陽に映えて眼に沁むばかりのあざやかさ

花菖蒲白と紫交りて自然の巧極地なりけり

春去りて初夏ともなれば涼しげにすだれ風鈴そよぐ風

定まらぬ白々の気配に空見上ぐ早々梅雨の訪れを

今の世はうそつく人_々の多かりき昔を偲ぶ日々なるか

熊野^{ゆや}の長藤

沼津 鈴木孝雄

藤の花頭に振れて腰屈めどこまでも続く熊野^{ゆや}の長藤

八〇〇年今も優美に香り立つ地元が守る熊野の長藤

豊橋に行つたついでに買い求む渥美のアサリは世界一かな

錦ヶ浦光の海を眺めつつ来し方懐う居待の月

筍の頭の方見定めて鋏を下ろすや春の精出ず

タラの芽を一つ頂き幹戻す残る枝葉に成長託し

恵みの雨キュウリの苗が急に伸び支柱の紐を一段上げる

雨降れどいまだ顔見ぬ生姜の芽畝の雑草摘み取り待てり

ナスの苗濃い紫の花開く触ってみるとへたにもトゲが

遊びつるネットに丸く巻き付いて親づる安堵キュウリ急伸

大き蝸牛

豊橋 胃 甲 節 子

夜べよりの雨に打たるる若みどりきらきら生命の煌き見ゆる

美しき若葉耀ひ瑞々しかかる良き日は幸福と思はむ

吾が門に大き蝸牛のゐる朝を花に水まく踏んではならぬ

早蕨も筍も初物の戴き物其の上に初摘みのお茶も浅蜷も

十五年五月にうから等と旅行きてめくるめくばかりの渦潮にあふ

交譲木の枯れたる親木の根より出づ若木に花咲く小さき花咲く

交譲木の親木は枯れて幾年か其の根残りて花咲くと知る

うから等は取乱し病院に馳けつけて妹を見守りをらむと測れど

吾が胸の高ぶる苦惱其のままに晴れ渡る空の下強風荒るる

彼く優しくつくし下さる嫁さんふたり妹は良き子に恵まれたりき

桐の花

東京 富岡 和子

この朝は投函終えたメ切り日アイリス咲きて小庭圧巻

アイリスのそつと手折りし仕舞い花パープルの指惜しみて暫し

子供の日クール便にてアスパラの若きはピーンとむらさき帯びて

学友の通夜に行く午後いくじなし幾たび見上ぐ柱時計を

友逝く日大ムラサキの垣根みち帰路にて気付く甘き香りに

かわらずに柚花盛り五月晴れきのうのように香る今日こんにち

移します自生のふた葉鳳仙花弾けた地より陽当る土地へ

狐雨かみなり去りて紺碧にブラシの花の刷毛のキンキラ

譲られし座席に感謝山手線努めて若く作りし午後

傾斜地にうす紫の桐の花七十年ここ根津異人坂

共に生きる道

大阪 伊藤忠男

人は人国は国とてこの狭い星で争う何と愚かな

憎しみの連鎖めぐりてままならぬこの世の戦避けられぬのか

自然との闘い過酷知りつつも挑み続ける科学者の道

民族の誇りと驕り紙一重戦はほんの思い違いで

人生は戦の連続誰言わん我との戦いあるが故なり

風向きも北は南がしのぎ合う季節争う五月の空で

武力とて所詮一時の威嚇なり戦無き世が繁栄の道

青空も熱き陽射しに紫外線耐える日になる夏の始まり

虫除けと団扇手に持ち浴衣着て楽し声する孫遊ぶ庭

息切らす遊び疲れた孫の手に迷いホタルが止まる夕暮れ

ブランコ

春日井 清澤 範子

若葉雨少し濡れつつ夫と来て神社に祈るなり無事なる今日を

翠雨の日にて吾の散歩は休みたり椿の若葉白く吾が眼に

八王子神社の大木剪り倒され境内すっかり明るくなりぬ

娘よりプレゼントの眼鏡をかけてアララギ楽しく読みぬ

押ボタン式の信号渡り神社へ来ぬ手を合わすれば鳩が寄り来る

さわやかに陽は注ぎつつ吾が庭の椿の新芽白く光れり

夫も娘も気管支炎にて伏しをりて吾世話するも最善を尽す

安定剤のハンデイ背負って勤めゐる娘は一生懸命頑張り帰る

ヘルニアの足の痛みに耐へる娘なり吾をかばひて朝市に来ぬ

吾と娘と二人してリハビリ歩く道公園のブランコにゆれてみるかな

「フィシヤーと筋無力症」 名古屋 近藤 映子

滴々と点滴落ちる一滴が今は私をささえて居りぬ

緊張時を乗り越え時を得たれども夫は如月に逝つてしまひぬ

わが夫の四十九日の法事参り吾又病室に戻る寂しさ

われ三月一日入院してより四月十日花の盛りを病室に居ぬ

病院の芝生の中庭杖持ちてリハビリ歩きは理学療法士付

こんなにも芝生の庭は歩きにくきもの一步一步をふみしめぬ

四月中葉の晴天に病室に居る時はとても長いよ

粥二一〇gより米飯一五〇gに変わり良く噛みて食する

リハビリは午前午後と歩く事外は春なり花散り始める

例えようのないこのつらさ夫逝きし吾は病室の中

梅鉢草

新城 半田うめ子

孫の香奈自動車にてサゴーへ行くのでありて館山寺温泉

手入れせぬ前の畑に雑草のはげしくのびて水鳥のさわぐ

今日も又わが庭に来て数ひきの愛らしき猫遊びてゐるなり

石雲寺梅鉢草の咲き居りし友と来たりて眺めをりたり

今日も又楽しみ居り本宮の天然温泉友と来たりて

何事かさわぎてゐるなり石畑の中にて数羽のからすの居りて

杖をつき若者らしきがヨボヨボと歩き行くなり不思議なりし

道ばたに落ちてゐるなり十円玉幾つか拾ひぬ時折りのこと

思ひ出

東京 小柳千美子

薔薇百花風の香れる庭園の水面に数多遊ぶ水馬

網代石青石雨の庭園に涼亭ありき宴となりぬ

木洩れ日にきらめき流るお茶の水赤きまま吹く武蔵野の風

通り抜け路地に天台地蔵尊佃の渡し草の花咲く

散る萩に秋を惜しまん百花園赤き実割れて鳥を誘ふ

一葉を偲び菊坂炭団坂三四郎池は紅葉の中に

鳥騒ぐ新宿御苑冬桜うすら日浴びてほのと立ちをり

園内に八十八景六義園蓬萊島に憩ふ水鳥

町騒を遠くに置きし梅園は紅白枝垂れ容姿競ひて

堅香子の花の群れ咲く殿ヶ谷戸湧水走る音のさやけし

カントウ蒲公英

東京 森岡陽子

花水木八重の桜と新緑の木々囲まれし美術館カフェ

春の午後長閑な川の土手歩き友と探したカントウ蒲公英

雨あとに窓から覗く狭き庭瞬く間に伸ぶ草むしりなり

友の待つ電車乗換へ埼玉へ久しき食の埼玉ポーク

古稀迎へ嬉し楽しきシルバーパス地図を眺めてあのバスあの町

見頃過ぎ命舞い散る桜花樹下のベンチピンクに染めし

新緑の山の麓の友情は大好きの我と人好きの犬

工房へ向う山道その崖の斜面に可憐な二輪草咲く

道祖神供へられるたる名知らぬ草花横の道端そつと咲き出づ

風薫り窓辺の陽射し変はるとも何故か芽が出ぬ付録の種は

田 植

豊橋 伊与田広子

八十路^{ヤッジ}過ぎ病むことなきの生活は一生続かむ望みてをりぬ

身体に良き物食ふが良きと云ふスーパーのチョコレート皆買ふ

レンジにて芽出し玄米作り炊くやはらかくなりわれに食べ良き

道路でき町中となりつばめなど今では見ることも出来なくなりぬ

マローンの結成したる合唱団病院空港水道鉄道

会社にて合唱団を結成し上下関係親しくなりぬと

新川は水満々と流れをり田植始まりしかと思ふなり

ふと思ふ津波来たならば逆流し低地にあふれ被害とならむ

新川は里の田植に水流し田植のすめば干上りてをり

われ一度市役所に行き聞きたしと被害なきやう話してみたし

気がつけば

蒲郡 杉浦恵美子

堀河通ひたすら喋りつつ歩く叔母とわたしと半年ぶりにて

この径は右折を避けて迂回せむ夫の言ひ付け今も守れり

三年経ち夫との日常薄れしが些細な記憶がふとよみがへる

気がつけば今日は一日籠り居て誰とも話さずニュースも知らぬ

ああ然うだ今のわたしは夢がない悩みもないしどこか無機質

やることが山ほどあるのに草取りを始めたわたしいつものことよ

裏藪の鶯盛んに鳴いて居る表通りの騒音よそこに

最上のものは未来にあると云ふ夫を亡くしし我にもなのか

こんな刻あったからこそ救われるそんな気もする夫の微笑み

ポとポーの組合わせなりモールス信号夜更けにポポポポ口ずさむ

波の上を

豊川 平松 裕子

屋敷四隅に撒くべき米と塩の皿撒かずに早やも四月となりぬ
痛き足引きずりつつも庭の草むしりてをりぬ休むと決めし日
たつぷりと眠り取りたる朝なり乾ききりたる湿布取り替ふ
ふがいなさに眼を落とす足元の水たまりに雨落ち始む
水たまりに雨はポツポツ落ち始め輪を描きては描きては消ゆ
入り日受けつばな輝く分離帯沿ひて走れる直なる道を
波の上を浜辺に向きて白波の幾筋も立つ兎走ること
波の上を兎が走ると語りし客しばし我が店に姿を見せず
九十の翁は久々顔を見せ兎走る日は海がうねると

ほほえみかくる

豊川 山口千恵子

初夏の光を浴びて稔りゆく転作田の小麦のみどり

うすあかく色付き始めし小麦の穂雨もよひなり今朝吹く風は

わが植ゑし茄子苗十本根付きたりビニール袋の被ひを取らむ

エプロンのポケット一杯摘みとりぬ青き莢太き今年の豌豆

摘みて来し豌豆の莢の筋をとるポキポキの音楽たのしみながら

里芋の芽は一勢に出で来たり雨上がりの畑に青き一うね

やはらかき巻葉しずかにほどけゆき切り込み深きモンステラの葉

一年を海外留学して帰りぬ少し太れる桃子の姿

重きトランク押して出でこし到着口われを見つけてほほえみかくる

学びしことこれより学びたきことを祖母われにしばし話しぬ

コバルトブルー

豊川 小野可南子

畑よりの菜花つぼみ菜そのみどり御浸し胡麻和えカラシ酢みそと

生え揃ふ菜物の類列たくひをなす今日こそ抜かむ勢ほひてゆく

母の墓に春の花々つぎつぎと水仙芍薬黄のアイリス

ほぐれこし芍薬の蕾を剪りてゆく今朝はかの人思ひて楽し

朝の日に長く細く我が影よ背を真直ぐに直ぐに正さむ

キシキシと砂をきしませ歩を進む中田島砂丘を初めて歩く

三つ編みの女学生なりし我が母は中田島砂丘の遠足言ひき

太平洋の今日の海色コバルトブルー母もこのうみ懐かしがりにき

サラサラの砂に足をとられつつ赤海亀のサンクチュアリーを

金華山の名前の由来とも聞き及ぶこの黄金色の若萌えこそが

上野記行を辿る

豊川 夏目勝弘

鶯坂を子規は幾度通りしや木下づたひに博物館へ

雪折れの枝枝集めある上野の森まだそのままの枝なまなまし

寛永寺は今日も入らず音楽堂芸術大学横目にとらへ

彰義隊の碑には詣らず少し行き子規の記念の球場の前

尋ね探し三十八段を踏みしめり摺鉢山の前方後円の上

東照宮の黄金の扉を遠くに写し清水堂また不忍の池

ハチスなす形黒ぐる池隅に風に集まり不気味に浮ぶ

折れ曲り入り組み乱るる蓮の茎今日吹く風に枯れ色ゆれず

一時間かけし子規の上野記行尋ね探して二時間我は

三月に三十年ぶりに降りし雪根岸に行かず新幹線へ

地球こそ

横浜 阿部 淑子

端午の日湯面に浮ぶ菖蒲葉のピンクの根元精気は満ちて
湯上がりに夫は莖葉を笛にして鳴して見せる幼児の如く
ぼたん花散りし花びらおしみつゝ数えてみれば九十枚余
剪定の刃をのがれ咲くつゝじ花運よく花よと声かけ通る
娘聳心肺停止も同僚の救急措置にて命救わる
地球こそかけがえのない故郷と若田氏の言葉宇宙の土産

妻の傍ら

豊川 白井 信昭

春を待ち畑に培う母の背小さく見えて会はずに帰る
日に五度犬の散歩もようやくにコートを脱ぎて身軽になりぬ
点滴の一滴一滴の終わるまで見つめてゐたり妻の傍ら
昼は咲き夜は眠れる合歡の木のさがらの森に折られてありぬ

かくれ家

「招待」 秋山逸穂

かくれ家は新幹線の線路した生ぬるい珈琲ひと口ふくむ
風呂場より湯のあふれいる音聞こえ扉あければ湯のにおいする
からすより声かけられし夕暮れはさびしさつのり小石けるなり
早朝のまぶしき陽射しをあびている市場の入口水の匂いす
濁りもつ冷たい珈琲飲みおれば氷のかどがまるくなりゆく

現代学生百人一首

東洋大学

おかえりと足に抱きつく妹よ頭の位置がまた高くなつたね

青森県立八戸工業高等学校 二年 佐々木 義輝

久方に父の手料理口にするぶ厚い手から生れる愛情

青森県立八戸工業高等学校 三年 橋端 宏弥

携帯の履歴に残る文字の中言葉の棘を後悔してる

岩手県立沼宮内高等学校 二年 小森 香菜

『いじよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

空仰ぎこひのぼり上げゐる夫と幼白き飛行雲一直線に流れて

今朝よりの新聞連載の漱石の「こころ」を我はまず読まんとす

吉見幸子

カラカラとコロンコロンと烏らは家の棟より貝殻落す

初夏の風はなぎつつ吹きてくる赤々赤潮なぎさに動めく

牧原正枝

春うらら久しき友とはじめてゆくガラス館にある万華鏡を観むと

夫と吾無口なるままの縁側にすつと吹き来ぬ初夏の風

岩瀬信子

墓地の隅前垂れ赤き六地藏に温き季節の日差し移ろふ

忙しげに狭庭を横切るつばめ二羽世代をつなぐか初夏の午後

石田文子

「おめでとう」とわが誕生日にケーキも買ふ寿司ある訳を義父母は知らない

おそろひのTシャツを着て初夏の森を下れば海の煌めく

森厚子

水入れし田圃に二羽の鴨のゐて重ね重なり水輪広ごり

花桃の-high 枝葉の濃緑のなかにま白き花の残り花

山崎 俊子

また今年も綺麗に花が咲きました君に供ふる花房の藤

けふ降るは十雨の雨か蔦の葉の翡翠の色のいとど美し

三田美奈子

卒園の幼の笑顔の誇らしく今日吹く風も何やら華やぐ

むくむくと楠の山々盛り上がる数多の生命を内に孕みて

水野 絹子

常々はひっそりしたる境内に今日は彼岸の施餓鬼に賑はふ

加古川に孫送らむとするわれは青春切符の楽しき旅よ

牧原 規恵

一区切りつけねばならぬこの夕べ春のやさしき朧の月が

我が家に今年も来たたる燕等よ初夏の風に自由に飛ぶごと

稲吉 友江

振り返り「あったかいね」と声かけてくれたる人よ自転車の人

ベランダに出でてシーツを広げ干すわれに吹きてくる初夏の風

鈴木美耶子

『俳句』

頼りなく切れる食パン労働歌
新しきコーヒーカップ聖五月
頭から落ちさか上り五月空

植村公女

西郷さんの刀短し聖五月
山法師上野の時の鐘ならず
春の草根こぎの土の重きかな

松本周二

若葉冷天海和尚示寂の碑
降り残す青葉若葉の匂ひかな
国分寺国分尼寺址青き踏む

山元正親

時の鐘結び葉こぼす雨雫

小柳千美子

紫陽花に不忍の池広きかな

鳥雲に古里遠く嫁ぎ来て

上野山青葉若葉に鐘の音

川井素山

新緑や雨水を浴ぶる鳩の群

引鶴や群声のこし万里の旅

夏めくも師の姿なき池の端

森岡陽子

金箔にぬられし唐門濃紫陽花

蛙跳ぶ一氣に職人菰外し

枝葉揺れひよいと顔出す雀の子

田中清秀

紫陽花や師の影しのぶ池の端

散りてなほ苔庭飾る落椿

私の一首

出たいとて他に行き場所ありはせぬさりとて哀しき夫の眼差し

杉浦恵美子

『三河アララギ』 平成二十三年七月号

夫没後三年にして漸く介護の日々を振り返ることが出来るようになりました。これは夫が八ヶ月入院した病院から最後となる病院に転院して一週間経たときの歌です。気管切開して喋れなくなり、筆談でしか意志疎通出来ない状態の中、思い詰めたように「ここを出たい」と書きました。前の病院の看護師さんとの対応の微妙な違いに違和感を覚えたのでしよう。一度も不平を言ったことのない夫の訴えに途方に暮れたことを思い出します。

三が日孫と連珠を楽しめり手抜き無しでも三勝三敗

鈴木孝雄

三が日久しぶりにやって来た孫達はタブレットでパズドラに夢中になっている。バーチャルなゲームではなく、伝統の遊びも覚えさせようと囲碁を勧めているが、ちよつと取っ付き難いようだ。そこで手始めに五目並べを教えた。昨年までは鼻歌交じりで楽勝だったが、今年は真剣勝負でもちよつと互角となるほどに、中二の孫の腕が上がってきた。成長が嬉しくて詠んだ一首。いづれ本碁を打ちたいと願っている。

夢心地ゆう山包む緋色雲かがやき流る神々しくも

富岡和子

半年近く雪に閉ざされる直前の晩秋、北海道の大自然は譬えようもなく素晴らしい。

昨秋十日間程、十五年住み居る岩見沢市上幌の娘の家に在留。昼はブラウスですが夜はストーブを焚きます。農家は川で機具を洗うなど大童^{おおわらわ}。背高いシオン花は紫の畦道。目の前を遮る様に舞う赤トンボのなか犬と歩きます。青みの残る空に上弦の月。白鳥はV字型に飛来大きく美しい。温泉場が点在しおりその帰り路夕焼け雲は真赤赤。山焼けです。車を降り立ち尽すこと何れ程に。

数本のカラスビシヤクは芯延ばし群なして咲き向きそれぞれに

内藤志げ

藪の坂道を登り明るくひらけた所が私の門の道、その石垣の側にカラスビシヤクの花を見つけました。あまり目立つ花ではないのですが黒紫の芯を延し私は面白い花だと思ふ。数本の花が芯をのばし咲く一本一本花の向が違いそれが又又不思議、しばらく佇んでいた。

今は舗装道路がほとんど、草の道を歩くと道の草の可愛い草を見る事が出来ます。今年も小判草の長い群が見られると良いのですが。

ある自然科学者の手記 (26) 大橋望彦

『STAP細胞がいつか役にたつかな』

実に悲しい事実となつてしまった。思いもしないことが生じた感じである。こんなに人を喜ばせておいて、崖から突き落とすような事はして欲しくない。

科学、しかもそれを専門として来た者にとつて、このような事が本当にあるのだろうかと疑いたくなる事はかりである。論文の重さを今更ながらズッシリと感じる。正直言つて、悔しいのと、悲しいのと、怒りとが一緒に来たようなもので、何処にも持つて行き様がないのが情けない。

今、一科学者としては、捏造とか改ざんとかが問題ではあるが、正確なデータの公表に待たねばならない。然し、このSTAP細胞の考え方は、十分傾聴に値している。従つて、唯マスコミに乗つたニュースの事件記事として見逃す訳にはいかない。再現性についても、本人の言っていることを素直に認めると、我々の納得する方法の開示や、再検討は十分行ふ余地を残しているように思う。そういう事をやったら良い。NATUREの論文に

しても、誰かはこの問題に關しての追試実験をして、新しい知見を発表するであらう。日本人の発表が、ニュースに掻き回されて、真理の追求に影を射すような事は早く払拭したいものである。

最近、日本の科学者に対する風向きの悪さはどうなつていいのか。ES細胞でノーベル賞を受賞した山中伸弥教授までも、昔の論文が不正であつたのではないかとニュースとなり、調査の結果不正は無かつたとなつた。それでも、山中教授はそのようなことに対して謝罪している。こんな馬鹿なことは無い。あまりにも疑心暗鬼というか、科学者はこんなことで委縮してしまつては、折角の才能が塞がれてしまう。どんな科学者にも思い違ひだつてあるし、聖人でも無い。世間は少し、大局的に立つて、大人しくして呉れないか。間違ひは、自ずと後々判然とするのだから、その間違ひは他の研究からも判然とする日は来る。間違つた科学者はその時、学会で叩かれる。科学の世界では、その発見された事柄は、後々の色々な実験で矛盾を生じない事で、証明されるのである。世界中そのような約束となつてゐる。そして、そのような結果が新しい事を生んでいるのも事実である。科学の進歩はそのような事で支えられている。歴史的に觀れば、新しい科学の事実の発表は、常にタイトロープ(綱渡り)

のようなものであったのだ。素人が、唯ニュースとして興味本位で批判をしない事が良い。不正があれば、何れは判る。それが本当に不正であれば、制裁は何れ自然と下される。それで良い。

科学とは何か？との質問に、『科学とは、色々な事の仕組みを調べる事です。』と答えるであろう。では仕組みとはどんな事ですか？と聞かれて、正確に答えられる人はどの位いるのでしょうか。多分現在の科学者と言っている人もこの質問にタジタジとする人がいると思う。仕組み、即ち色々な現象の機構解析は、研究そのものであるからで、実はそれを説明するには、極めて専門的解釈の基に話さねばならない。それであるので話はややこしくなるのは当たり前であるし、そうでないと厳密な意味での説明とはならない。

さて、例のSTAP細胞であるが、「STAP細胞はあります」と小保方氏は明言したが、これはそうあって欲しい、と思うのと同時に、単なる勘ではないが、『STAP細胞はあるように思う』。そのようなスタンスで物を観ていくのも一つの解決法であると信ずる。この勘だというのもおかしいが、『STAP細胞』の作り方から観て、体細胞の中にはその極く一部にあらかじめ幹細胞のような未分化細胞が必ず混在しているのではないだろうか。

それは傷害を受けたときに直ちに再生出来る為の予備的機構として備わっていると考えても良い。ストレスがその動因に働くのも理に適っている。従来はそのような事は余計なことであるので、考えもしなかった。従って、神経組織や筋肉組織のような分化しきった組織に於いては、再生能力が殆ど無いのはこの混在する未分化細胞の割合が極めて少ないと思えば良い。若しこの事を仮説と考えるならば、それを確かめる良い機会ではないだろうか。そのヒントを与えたのが『STAP細胞』であると言ってもよい。このような少しでも取っ掛かりを観付けて、探求するのが科学であろう。それを改ざんとか捏造とかに振り回らされて、探究心を損ねる行為はあって欲しくない。

このような考え方をしようと思っっている矢先に、理研の理事会が、再検討の必要なしとの判断を下してしまった。もう少し理研は大人かと思っていたが、残念としか言いようが無い。益々この問題は科学の領域から外れたこととしか考えられなくなった。暫くはこの問題から離れて見ていよう。こんな事で日本の科学界が世界の笑いや者にならなければ良いのだが・・・。

絹の話 (44)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹と日本人

絹が中国で作られ始めてから5千年になると言われています。日本でも2千年にはなるでしょう。しかしどんな繭からの様な織物が出来ていたか分かりません。繊維はその様な長い間形を留めないからです。

人々は遙か昔に野外にあまた棲息する絹糸昆虫の中から、自然界の繭としては極小さなクワコを選んで家畜化し、少しでも白く、大きいものを選別し、遂に昆虫のブローラー化に成功し「家蚕」と云う新たな昆虫を作り出した事は実に画期家来な事でした。

人類は哺乳類や鳥類を色々家畜化して来ましたが昆虫の家畜化は今日迄他に有りません。ただ家蚕という蚕は他の野蚕の様に自由に飛ぶ事も出来ないのです、人が飼育しないと生存出来ません。

【繭を作って絹知いず】

絹はずっとずっと昔から支配者に独占されて来ました。農民がいくら繭を沢山作っても絹は権力者や豪商達の着用品であり、高価な交易品となり、遠い国々に運ば

れて行き（シルクロードや昭和初期の日本の輸出総額の45%等）、庶民がそれを自由に着る事は洋の東西を問わずなかった様です。僅かに出荷して残ったケバ（繭の外側のフワフワの部分）や屑繭で夜なべに紬糸を作り織物にしたり、真綿にして布団やドテラに薄く引いて使う程度でした。

近世の江戸時代中期以降徳令の為庶民の絹着用は禁止され、明治になって国家を支える輸出主力品となり、身近で遠い物になりました。戦時中は食糧増産のため、桑の畑は芋畑などになり「ほしがりません、勝つまでは」の言葉通り絹を着る空気は有りませんでした、戦後繭生産の回復と共に戦争の乾きをいやす様に呉服が売れに売れました。女性がどんどん職場進出して自由に使えるお金が出来たので、箆笥の中を満たす事に狂奔しました。嫁に出す娘には一竿も二竿も呉服で埋めました。この頃は絹の呉服をどれだけ持っているかが世の中のステータスでした。

女性の企業主など多忙で着物など着る機会も殆どない事が分かっていても、死んだ時二竿くらいないと恥ずかしいと言つてなるべく高価な物を買集める空気が有りました。しかし急速な生活習慣の変化により和服を着る機会が激減して戦後の物は殆ど箆笥の肥やしになってい

て、絹を親しく着る機会は無くなってしまいました。ですから一般の人は絹の感触を自分の物として理解してないのです。

現在の70才以上の方のお婆さんが夜なべに薄暗い所で真綿を作ったり、糸を紬いだりしている風景が絹の原風景として残っていて、絹はシャリットしたオーガンジーやトロットしたシホン、デシンなど用途によって様々に変化すると云う事は理解されず、フワフワで柔らかい物が絹だと思われています。

繭の事には詳しい人が多くいらつしゃいますが、その人達も糸から先の事はよく知っていません。

【絹販売の現場】

日本の絹は世界一と思っている人が今日でも日本人にも西洋人にも大勢いますが、絹の歴史5千年の内、日本が繭生産量世界一であった期間は百年にもなりません。その昔もその後も中国が世界一です。

日本製の絹を求めて来られるお客さんがいらつしゃいますが、一般には現在日本製の繭から作られた絹は販売されていません。どこの国の繭を使っても、織り、染めなど最終仕上げをした国の表示をする事になっているので最終加工が日本であれば日本製となります。

現在日本は中国はじめ世界各国から繭や糸を輸入し、他の繊維と混紡したり、合糸して製品作りをしているので、どこの国の繭を使っているか訊ねられても販売現場で答えられる人はいないでしょう。

屑繭で作った物と生糸で作った物では材料費が5倍も違います。生糸で作れば高くなるのは必然ですが、絹100%の表示に変わりは有りません。一般のお客様は屑糸で作られたフワフワした紬糸や絹紡糸で作られた物の方が好みます。本来の絹特有な柔らかい中にもシャリ感のある生糸で作られた物は「固い」「チクチクしないか？」等の質問が多く、いささか閉口しています。絹は本来紡（紬）ぐ物ではなく上げる又は繰る物ですが、多くの人は絹を紡（紬）ぐ言っていますので話がややこしくなります。繭から絹が作られている事を知らない人も年々増えていますので説明に時間がかかりますが、あまり興味を示してくれません。

絹は今後も一部の人の物なのでしょう。そうであつてはいけません。絹はこれから健康と環境素材と言う視点から再出発しようとしています。一部の人の物にして来たから5千年を経た今もよく理解されていないのでしよう。棉の様に大衆に理解される物にして行こうと思つています。

物理学者と詩歌の世界 (54)

一石

デイビッド・グロス

デイビッド・グロス (David Gross、1941) は米国の理論物理学者。ワシントン D. C. 生まれ。カリフォルニア大学サンタバーバラ校カブリ理論物理学研究所所長 (参考資料1)。

早熟であったグロスはガモフらの書いた一般向けの科学書を読んで刺激を受け、思考の力で現実の世界の仕組みを理解したり、宇宙の謎を解いたりできるかもしれないということに感動して、理論物理学者を志す。13歳か14歳の頃であったという (参考資料2)。

ユダヤ系のグロスはイスラエルに渡り1962年、ヘブライ大学を卒業。1966年、カリフォルニア大学バークレー校で G・チューの下で博士号を取得。1973年、プリンストン大学においてグロスは最初の大学院生フランク・ウィルチェック (注1) との共同研究により、素粒子の「強い相互作用」で成り立つ「漸近的自由性」を発見した。「漸近的自由性」とは、陽子や中性子の構成要素であるクォーク間に働く色荷に由来する「強い相互作用」は、高エネルギーになるほど (つまり近距離になるほど) 相互作用が弱くなり、自由な粒子のように振舞

うという性質。このことによりクォークが単独で観測できないことなどが説明できる。この性質は強い相互作用の理論「量子色力学」を発展させる上で極めて重要なものであることがわかり、その理論の基礎になった。この「漸近的自由性」は同じ頃デイビッド・ポリツァー (注2) によっても独立に発見された。ポリツァーの論文とグロスとウィルチェックの論文が1973年米国物理学会誌 *Physical Review Letters* の同じ号に掲載され、公式には、3人が同時に漸近自由性を発見したことになる。素粒子物理学のパラダイムを確立したこの功績により2004年に、グロスはウィルチェック、ポリツァーと共にノーベル物理学賞を受賞した。

グロスはまた、弦理論のような、現代素粒子物理学の最前線で展開されている野心的な分野においても超弦理論 (注3) の1つであるヘテロティック弦理論を構成するという大きな貢献をした。この研究は G・ハーヴェイ、E. マルティネク、R・ロームとの共同研究によりなされたので、グロスを筆頭にこれら4人組は、その後「プリンストン弦楽四重奏団 (ストリング・カルテット)」の愛称でよばれるようになった。

長らくプリンストン大学に勤め、E・ウィッテンや N・ネクラソフなどの傑出した後進を育てた。また所長としてカブリ理論物理学研究所 (KITP) を理論物理学の世界的中心地に成長させた。

ノーベル物理学賞の他、デイラック・メダル(1988)、ハーベイ賞(2000)、フランス科学アカデミー最高金章(2004)を受賞。

注1..

フランク・ウイルク(Frank Wilczek、1951) は、ポーランド、イタリア系の米国の物理学者。ニューヨーク州出身。シカゴ大学、プリンストン大学で学ぶ。プリンストン大を経て1980年よりカリフォルニア大学サンタバーバラ校教授、2000年よりマサチューセッツ工科大学教授を歴任。一般向けの著書に『物質のすべては光―現代物理学が明かす、力と質量の起源』(早川書房)がある。ノーベル賞の他に、J・J・サクライ賞(1986)、デイラック・メダル(1994)、キング・ファイサル国際賞(2005)を受賞した(参考資料3)。

注2..

デイビッド・ポリツァー (David Politzer、1949) は米国の理論物理学者。ニューヨーク州出身。1969年にブロンクス理科高校を卒業し、学士号は1969年にミシガン大学で、博士号はシドニー・コールマンの指導の下で1974年に取得した。ポリツァーは、トーマス・アッブルキストとともに1974年に加速器実験で発見されたジェイ/プサイ

中間子の理論的な解明に中心的な役割を果たした。ポリツァーは、カリフォルニア工科大学に移るまでの1974年から1977年まで、ハーバード大学のジュニアフェローの職に就き、現在はここの理論物理学の教授である。著書に南部陽一郎氏との対談に基づく『素粒子の宴』(工作舎)がある。ノーベル賞の他に、J・J・サクライ賞を受賞(参考資料4)。

注3..

超弦理論(スーパーstring)は、物質の基本的単位を点粒子ではなく、振動・回転する極小の弦(ひも、ストリング)であると考えた弦理論に、超対称性という考えを加え、自然界の基本の力(重力・強い力・弱い力・電磁気力)を統一的な枠組みで表すことを目指す。時空および物質のミクロな世界を扱うと同時に宇宙の誕生やブラックホールの本性を解き明かそうとする現在盛んに研究されている物理理論である。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia : David Gross
- 2) 大栗博司 : I P M インタビュー「デイビッド・グロス教授に聞く」(http://www.ipmu.jp/webfm_send/287)
- 3) Wikipedia, the free encyclopedia : Frank Wilczek
- 4) Wikipedia, the free encyclopedia : David Politzer

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十六 安田良子 2

牡丹散り父の忌過ぎて裏山の大藤の花咲くべくなり
ぬ 昭和二十五年

「斎藤先生の藤」と名づけて年毎にその豊かな花
を待ち恋ふ

永き心をとどめ給ひし布野山の藤浪の花咲けばおも
ほゆ 昭和二十八年

茂吉先生の歌に詠ましし大藤を残し木として裏山を
売る 昭和三十年

中村家は代々の大地主、山林主であり、敗戦後の改革
によって農地を解放したが、まだ山林は残っていた。醸
造を営んでいたこともあって戦前は屋敷内を川が流れて
いた。憲吉は日常詠として、「夕かげの小藤がもとの屋
敷川せせらぎ澄みて秋つきにけり」(『しがらみ』大正六
年)と歌い、茂吉は良子の婚礼のために来て泊まったと
き、「わがねむる床の下より清しくも水のながるる音ぞ
きこゆる」(『寒雲』昭和十二年)と詠んだような大屋敷
であった。

季節になれば裏山には大藤が咲いた。憲吉の一周忌に
来た茂吉が「友みまかりてはや一年やむらさきの長藤浪
の花咲かむとす」(『暁紅』昭和十年)と詠んだことを踏
まえたのが四首目であろう。その後、中村家では「斎藤
先生の藤」(二首目)と呼ぶようになり、咲けば必ず家
族皆で茂吉のことを思うようになっていたというのであ
ろう。

四首目には注釈が必要であろう。敗戦後の農地解放で
残されていた山林についても解放を迫る声があつてそれ
が進んでゆくことが良子の、「山林解放をうたふ三選の
村長が農地買戻して自作始めぬ」「裏山に炭焼く様を居
ながらに見つつ辛さを思ひやるのみ」等によつてわかる。
その売らなければならぬ山にせめて茂吉ゆかりの藤を
残したというところに作者や中村家の無念が読み取れる。

鴨山と吾が父の墓をゆきかへり五度赤名峠を越え給
ひたり 昭和二十八年

茂吉が人麿研究のためにたびたび足を運んだ鳥根県鴨
山と中村家のある広島県布野は県境を赤名峠に隔てられ
ている。良子が「鴨山と吾が父の墓を」とうたうのは、
茂吉が鴨山の踏査を本格的に始めたのが憲吉の死後で
あつたからである。

赤名越えは茂吉の歌にも、「この家に安らにいねて明日越えむ赤名の山をまぼろしに見つ」(昭和十二年)、「人麿のことをおもひて眠られず赤名越えつつ行きしおもほゆ」(昭和十三年)とある。また、ともに赤名越えをした土屋文明の妻テル子には、「若葉照る赤名峠を布野の峡より三人越えにき二十年の前」(『槐の花』昭和三十一年)という歌がある。茂吉にとつては墓参を兼ねて鴨山踏査ができるので、五度も立ち寄ったのであろう。

「大根の葉に時雨ふる」御歌掛けていよよ寂しも君
亡き今を
昭和二十八年

茂吉の死を悼む歌である。東京での葬儀から帰った布野の家での作であろう。茂吉の「夕されば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも」(大正三年『あらたま』)の書かれた軸か短冊かを壁に掛けて偲んでいると、この歌の寂しさが茂吉を偲ぶ心をいつそう寂しくさせるというのである。

ただ老の徒食をなげくと大石田ゆ賜ひし御便り今ぞ
悲しき

これも昭和二十八年の歌である。茂吉は昭和二十年四

月から山形県金瓶に疎開、翌二十一年大石田に移り住んだが、この戦中戦後の不自由な思いを一部の人に書き送っている。良子には、

○小生も健康ですが老境が身に応へます、只今無為で徒食で、実にはかないものです

(昭和二十年九月二十二日)
と書き送っている。この年はまだ金瓶に疎開中だったので、良子の歌の「大石田ゆ」は記憶違いかと思われるが、このようなことを書くところには茂吉がいかに良子に心を許していたかが読み取れよう。

三十九年をおきて父母の墓並ぶ茂吉先生文明先生の
御手に
昭和四十八年

良子の母、すなわち憲吉の妻シヅ子は昭和四十八年に死去した。歌は、憲吉が亡くなつてから三十九年を経て両親の墓が並ぶことになった、憲吉のときは茂吉が骨を折ってくれ、今度は文明が助けてくれたので二人のお陰だったというのである。

父憲吉の娘であるということで良子は茂吉、文明という二人の師に恵まれ、そのことを生涯ありがたいこととして心に刻み、その恩を丁寧な詠んだ。茂吉が良子に当てた手紙も相当の数にのぼることを付け加えておく。

楽しい時間 20

山本紀久雄

2014年5月31日

相棒・家内の治療で毎月富山市を日帰りする。当然にエア―となるが、到着する富山空港は二つの面で面白さがある。一つは着陸アナウンス。「富山きときと空港に着陸します」と述べるが、乗客は「きときと」の意味が分からないから「きよときよ」と窓から空港滑走路を見下ろし、二つ目の面白さに気づく。それは滑走路が河川敷にあること。国内ではここだけで、川の名前は神通川。

ただし、空港ターミナルは河川外にあって、富山市中心部の南約7kmに位置し、富山市街地や富山IC、国道41号から近く利便性は高い。

「富山きときと空港」というネーミングは、昨年、富山空港開港50周年および富山県置県130周年になるのを記念し、愛称として命名されたのだが、富山空港に降りる他県の乗客には馴染なく意味不明で、何だろうと疑問持ちつつも、慌ただしくバス・タクシーで市内に向かう。

因みに「きときと」とは富山弁で新鮮という意味とのこと。多分、富山は魚もコメも水も美味くて新鮮なので、命名



したと推察しているが、地元の人でも馴染が薄いようである。空港からタクシーに乗って富山中心部に向かって気づくことは、立山連峰の素晴らしさと、道路が広いこと、家が大きいことである。

その立山連峰は、標高2,999mの劔岳を中心とした山並みであるが、この景観を楽しむならば、富山市役所の70m展望台がお勧めである。勿論、無料、自由に上れる展望塔。これがあまりに立派なので市役所受付の女性に「すごいですね」と聞くと、手を口に当て「バブルの時に建てたものですから」と囁くように言い、微笑む。



いずれにしても当方の体験では、チリ・サンティアゴ空港に着き、向こうに白く高く連なるアンデス山脈を見たとき以来で、世界に自慢できる景観であろう。

次に気がつく家の大きさである。富山県の持ち家延べ床面積17733㎡(3373坪)は日本一である。全国平均は12103㎡(3667坪)であるから富山は1.46倍で、最下位は東京都の9076㎡(2750坪)であるから、富山は東京の約2倍の広さである。したがって、東京から初めて富山に来た人は「ここはお寺が多いですね」と、家を寺と間違えるほど、一軒家の敷地と家屋が立派である。

さて、富山市中心街に入っていくと、しゃれた市電が走っている。おや、これはドイツのカールスルーエやパリのト



(富山市)



(カールスルーエ)



(パリ)

ラムと同じかと思う。カールスルーエとは、ドイツのバーデン・ヴュルテンベルク州に属する人口約28万人の都市で、ライン川の近くに位置し、ライン川とは運河で結ばれ、南にはシュヴァルツヴァルト(黒い森)が広がり、フランス国境に最も近い所で街の中心から約10キロ程度、約50キロ北にハイデルベルク、55キロ北にマンハイム、60キロ南東にシュトゥットガルトが位置し、約30キロ南のバーデン・バーデンは、国際的な温泉保養地として知られている。カールスルーエは大好きな街で、今までに20回は訪れているが、この三市を走っている車両が、写真のように似ている。

また、この三車両、いずれもJR山手線や中央線や都電荒川線とも車体スタイルが異なる。

どこが異なるのか。都電荒川線と三市の車両を一見してわかるのは床面の高さの違いである。一般の路面電車・トラムの場合、床面の高さが70cm程度だが、三市の車両は床面が30から35cmとなっている。これを低床電車という。因みにウィーンには18cmの世界で最も低床電車があるという。



(都電荒川線)

低床電車は、客室床面をプラットホームまたは地上とほぼ同じ高さに近づけることにより、プラットホーム・乗降口・客室中央通路床面の間の乗降客の動きをバリアフリー化している。都電荒川線は低床電車ではないので、プラットホームの高さを高上げすることでバリアフリー化することになる。

三市の車両は「ライトレール」と称される。正式には「ライトレールトラジット (Light rail transit, LRT)」とも呼ばれ、日本語では「軽量軌道交通」と訳されている。LRTは小型車両で近距離輸送を行うための鉄道を、従来の鉄道と区別するためにアメリカで生まれた用語で、ヨーロッパのトラムトレインも厳密には違うがこれに類する。

このLRTシステム、日本ではここ富山市のみが導入・運行している。どうして富山市だけなのか。何故に他の都市ができないのか。その理由を述べると長くなるので省略する。富山市でもう一つびっくりすることがある。それは経済協力開発機構 OECD から2012年に、メルボルン、バンクーバー、パリ、ポートランドと並んでアジアで唯一富山市が「コンパクトシティ先進都市」として認められたこと。この理由も解説し出すと長くなるのでやめるが、偶然、相棒の病気によって、時代の先端を知るといって「楽しい時間」を持つことができた。

上野記行

夏目勝弘

宇都宮での仕事が午前中で終つたため、子規の上野記行を歩いてみることにした。

子規が二十七歳のとき根岸の陸羯南の東隣に転居、俳句の分類が続き七月、八、九、十、十二、十四、十七、十八、二十九を除き連日俳句の分類に携わる。と年譜にある。

上野記行は、十四日のみが何も用件がないたぶんこの日ではないだろうか。

根岸を出て御成道より広小路に出、上野に入りまず彰義隊の墓へ。

○塚古りて咲くや點々苔の花

○日盛りの八百八町焰立つ と詠み

そして木の間つたいに清水堂に上り一押し坂を下り摺鉢山へ上野紀行には「羊腸九回頂上に達す」とある。

案内状によると約千五百年前の前方後円形式の古墳とあり、道より高さ五メートル。

自分も摺鉢山に上りたく見つかからず、工事をしている人夫に聞くと、三メートル程の先に小高い丘を指さす。

子規の上った所から三十八段で頂上に、子規は羊の腸のような九折を上った。

子規は頂上で

○昼涼み摺鉢山に腰かけて と詠む

頂上のベンチに一人の男が微動だにせず前方を見ていた。腰かけてみたかったが、雰囲気的にやめて下りてしまった。

少し行くとグラウンドがあり、子規記念球場の文字。子規の野球に関する記事を年譜より明治十九年二十歳。

ベースボールに興味を持ちマツチ(試合)などする。ポジシヨンは、キャッチャー。

明治二十一年、この年ベースボールに耽りバット一本球一個を生命のように思う。

明治二十二年(夏) 帰省中、碧梧桐にボールの受け方を指導する。

十一月三十日(土) 午後、学校でベースボール大会が開かれ参加する。

十二月「ボール会」を設立、上野公園空地で二回程ベースボールを行う。

明治二十三年三月二十一日(木) 上野公園博物館空地で常盤会寄宿舎のベースボール大会(第四回)を行う。

寄宿生のベースボール番附評判記をつくる。

野球服姿で記念撮影を行う。

五月二十四日(土) 明日開催される常盤会のベースボール会のため、ベース四個、バット一本を買う。バット一本は即日折つてしまい、買いなおす。

五月二十五日(日) 隅田川の吾妻家で、ベースボール会を開く。これ以上年譜には、ベースボールに関する記事は出てこない。

摺鉢山を下りた子規は、博物館そして寛永寺で○破風赤く風緑なり寛永寺 と詠み。

音楽学校美術学校の前より動物園にて、○夏瘦としもなき象の姿かな と詠む。

東照宮で一句○古杉や三百年の風薫る と
そして不忍の池では

○昼中の堂静かなり蓮の花 と詠み
一時間漫遊ここに、にり再び身を俗界の中に投じ去りぬ。

子規の歩いたのは夏、今現在上野公園には三月としては三十年ぶりの雪が降りだした。

思いは子規より現実にもどり、根岸まで行く予定を変え新幹線に乗ってしまった。

「氷魚」のことから (162) 岡本八千代

今日は五月二十三日、語呂合せて「恋文」の日というそう
だ。なるほどラブレターの日が？と暦の見方を知って楽しく
なった。

こんな季、やはり楽しそうな子規を思い浮かべる。子規の
子供の頃は、一体どんな文章を書いていたのか？と心が向い
てきた。

子規全集（講談社）第九巻は、「初期文集」とあるから、
しばらく、その文集について読んでみたいと思う。（原文を
写す時、なるべく現代の漢字、かなづかいにしてゆきたいと
思うが、片仮名、平仮名の別も原本のままにする処はそのま
まにする。）

自笑文章 第一編の序文を書き写してみる。

▲自笑文章自序

「此編タルヤ是余カ先ニ勝山学校ニ於テ作りシ所ノ文章ナ
リ、此編ノ首始ニ掲グル所ノ文ノ如キ 上等小学第八
級ニシテ即余ノ年十一年三ヶ月ナリ、余一日故紙ヲ探テ
文稿ヲ得タリ 是小時小学校ノ作ナリ 開キ見ルニ其文
晦渋（難解）其説通セス 余稿ヲ掩ヒ歎ジテ曰ク 余ノ
少ウシテ文ヲ作ル能ハザル其レ此ノ如キカ自ラ笑ハザラ
ンヲ欲スルモ得ンヤ 余是ニ於テ以為ラク 今此文ヲ拔
萃シテ以テ後日之ヲ見テ自ラ其拙ヲ笑ハント欲シ 或ハ
削リ或ハ添へ或ハ加へ或ハ省キ自ラ妄リニ圈批点ヲ加へ
前述セシ所ノ意ヲ取り 題シテ自笑文章ト曰フ 覽者

モ亦当ニ笑フベシ 明治十五年六月下瀬（下旬）深夜南
窓一燈ノ下ニ書ス 「香雲辻史 識」

この自笑文章の序文は、「香雲辻史」となっているが、子規
自身のことである。なぜならば、当時明治十五年六月頃は、
松山中学三年頃で、すでに回覧雑誌などを作っていた。そして、
「香雲なるペンネームをよく用いていたらしい。「辻」という
文字は、十字路、または道端などという意味か？「史」は役
人ともいうのか？それとも、単に「ふひと」つまり香りの
よい雲のように、その辺りに漂よっているような意味か、面
白いペンネームだ。ともあれ子規は、何でもなし、淡々とした、
ひょうひょうとした自分を言いたかったのかもしれない。

この序文を書いたのは、明治十五年であつたけれども、ま
ずは勝山小学校の手紙文から。

△自笑文章第一編

松山 正岡常規 著

明治十一年 十一月作

○贈柑子（みかんの一籠を人に贈る手紙）

「寸楮^{すんそ}拜呈仕候。寒氣凛烈^{れんれつ}え候に御座候共御全家御一同。
益御多祥目出度存候。千里馬遇伯楽。今度令兄某官御拜
命。恐悅至極御事と奉存候。依而祝印迄に乍些細柑子壹
籠。任到來不取敢備貴覽候間。御笑納被下候ハ、幸甚之
至ニ御座候。頓首」

漢文調候文。「千里馬遇伯楽」は、願ってもない程の官職
に付かれた人への手紙。

（以下来回へ）

「歴代天皇御製歌」(二十六)

賈名海屋資料館

『宇多天皇』第五十九代・在位八八七年(二十一歳)―八九七年(三十一歳)

宇田天皇は、光孝天皇の第七皇子。後醍醐天皇の父、政治の刷新に心をかけられ、「寛平の治」とたたえられた。日本三代実録、「類聚国史」を撰し、文化面では、「寛平御時菊合」「寛平御時后宮歌合」などにより多くの歌人を生み出した。

宇田天皇の発意により、九月十三日夜を「名月の夜」と定められ、収穫をむかえる大豆や粟をお供えする「豆名月」「粟名月」とも。太宰府の役人からの黒猫をいたく愛された。

菅原道真は、この時代の人であり、遣唐使を廃止に至らしめた。

身ひとつにあらぬばかりをおしなべて行廻りゆきめぐてもなか見ざらむ

寛平御集

別れを惜しむのは、ひとりだけではない。皆が皆、廻り廻つてまたいつか会えるだろう。

行きて見ぬ人のためにとおもはずば誰か折らまし庭の白菊

続古今集

行っても逢えないお人のため、と思わなかったら、誰が折るものですか。庭の白菊を

ことのはスケッチ (427) 今泉由利

『貫名海屋 私注』 ⑦

【筆塚】

伊藤若冲碑、所在、京都市伏見深草石峰寺

(14) (15) 中国の昔の名画家といわれた顧、陸、呉、李、ののごとく、その心持ちも非凡な腕前も、人知でははかれない神の域に達していた。

(15) 仏教の經典に説かれる「変相」。極楽浄土の莊嚴、地獄の形相を描き示し。

一切の現象は刻々移り変わるものであることと描きだしている。

(16) 空間の時と、無限の広がりにおける神秘を明らかにしている。

(17) 技法もここまで極まった。

(18) 後進の者は、次々世に出てはくるが、自ら進んで後に従おうとは望まなかつただろう。

(19) もし、自分自身をむち打ち、精進する人がいて、理想を求めることを止めなければ

(20) その勢いは、必ずこの偉大な思いに至るにちがいない。

(21) 若冲居士は、そうした思いを、無欲に心静かに、無形無象としての石像に託した。

(22) あの石像の意図するのは、特徴、属性の有無、姿形、様相の有無の間に、

(23) 変化極らない、種々様々な光が現われ、

(24) 奇異なことも様々に変化してゆく。

(25) ただよう雲、流れる水、一つの所を選び留ることがないように。

(26) たとえ道を得た変化自在なる者が、物の変化を描く筆法があつたとしても、

(27) 究極まで突き詰めることはとても出来ないだろう。

(28) 有相(特徴のあること)は、無相(特徴の無いこと)を極めることが出来ない。

(29) 無相は、有相を極めるのに十分なのである。

(30) それゆえ無相の石像に、ことよせようとしたにほかならない。

(31) 若冲居士は、当初石像を庭先に置いた。

(32) 絵を求めに来る者がいれば、

(33) その都度、その描いた画を一枚出し、石像制作を広げていったのだつた。

(34) それから間もなく、俗世を避け、頭髪を剃り、残りを縛り束ねていた。

(35) 石峰寺石像近くに、草庵を結び、一枚の画を一斗の米と取り換え、最後まで、その身をささげたのだつた。

(36) 若冲居士の心が「奇」であると、そう評するに値する。

(37) 遺言には、墓は筆形にする、画に対する若冲居士の心を意識しないではいられなかつた。

(38) 庚寅(文政十三年、一八三〇年)の秋、都に大地震があり、倒壊したのも多く、阿羅漢石像も被害を受けた。

(39) 葵己(天保四年一八三三年)、若冲居士の後裔の清房は、もどおりに修復をした。

(40) 私に、その事の次第を墓碑に書き付けさせました。

(41) 若冲居士には、血筋の者がありません。

(42) 貫名苞(貫名海屋)撰。

伊東若冲碑、所在、京都市伏見區深草石峰寺

關西「石」下
京阪電車「深草」下車

奇ナルカナ若冲居士ノ心ヲ丹青ニ用フルヤ、余、遺跡ヲ見ル毎ニ其ノ人ト爲リテ想見
シ、其ノ壽藏ノ碣ヲ讀ムニ及ンデ、其ノ用意ノ果シテ常人ト異ナルヲ知リシカ、後、石
峰ニ上リテ其ノ建ツルトコロノ五百ノ應眞像ヲ觀テ、始メテ其ノ終身ノ心カヲ阿堵ニ
用ヒタルヲ知レリ。居士若キヨリ專ラ新奇ナルヲカメ套習ニ涉ルヲ欲セズ、刻意單精
シテ水墨翎毛ヲ作ル。或人評シテ若冲ノ畫ハ巧ミナリト雖モ水墨ニ止リ設色ニ至ラバ
能ハザラント云フ。居士之ヲ聞キ乃チ大設色ノ數十幅ヲ作り、又瓶意シテ彩人ノ爲サ
ザルトコロヲ賦ス。今相國寺ニ藏セルモノ是レナリ。蓋シ平生合作ヲハ自ラ惜ミ人ト
妄リニセズシテ、諸名山ノ意ヲ藏スルモノアリト云フ。夫レ古ノ名匠、顧、陸、吳、李
ノ如キハ其ノ心ハ靈ニ其ノ腕ハ妙ニシテ、仙爪ノ到ルトコロ、竟ニ描イテ佛經中ノ諸
變相ヲ出スヲ得テ以テ、宇宙ノ秘幻ヲ祛發ス。技茲ニ到ラバ盡クルモノト謂フベク、

後生輩出スルモ皆隨若トシテ敢ヘテ後塵ヲ企ツル者ナク、若シ鞭勵ノ士、進歩又進ミ
進進シテ止マザルモ其ノ勢必ズ將ニ茲ニ及バント思ハントス。居士ハ乃チコレヲ澹漠
無朕ノ石像ニ寄スナリ。蓋シ其ノ意ヲ思フニ彼ノ無相有相ノ間ニ千奇萬變シテ寶光ヲ
百出セシムルカ如ク、話詭怪誕ナルハ行雲流水ノ捉定スベカラサルカ如ク、神仙點化
ノ筆アリト雖、安ンゾ窮極スルコトヲ得ンヤ。然ラバ則チ有相ハ無相ヲ盡スニ足ラス
シテ無相ハ乃チ有相ヲ盡スニ足ルナリ。故ニ獨リ寓ス。而シテ居士初メ石像ヲ肆頭ニ
置キ、來ツテ畫ヲ請フ者アレバ輒チ其ノ一ヲ出サシメテ資ニ鋪セシム。既ニシテ塵土
ヲ厭ヒ、鬚毛ヲ剔リ縛シ、石峰石像ノホトリニ庵シ、一盡モテ斗米ニ換ヘ、終ニ身ヲ
以テ殉ス。其ノ意ヲ用フルコト奇ト謂ハザルベケンヤ。其ノ遺言ニ至リテハ墓ヲ表ス
ルニ筆形ニ倣ヒ、竟ニ懷ヲ忘ルヽコト能ハズ。哀シイカナ。庚寅ノ秋京輦ノ地大震ア
リテ頽摧スルトコロ多ク、應眞モ亦免レズ。歲ノ癸巳居士ノ孫清房修理シテ舊ニ復セ
シメ、余ヲシテ其ノ由ヲ墓表ニ識サシム。居士孫アリ。

貫名苞撰ブ

編集室だより【二〇一四年 五月】

○アルゼンチンのネウケン州、白亜紀の地層から、90tにも及ぶのではないか、アルゼンチノサルスの化石が見つかった。存在可能な最大級の恐竜。良い空気、良質な食物を思う。

○東京国立博物館。「栄西と建仁寺」

風神雷神図、猿屋宗達。江戸時代。

雲龍図、海北友松、桃山時代。

建仁寺ゆかりの数々名宝。

江戸時代の京都を代表する伊藤若冲筆の「雪梅雄鶏図」にも出会えた。

アメリカからやってきた巨木、ユリノキの頂度花盛りを楽しんだ。

○脳外科の検査づけに、複数の医師の意見、セカンドオピニオンを受けることにする。

○相撲クロッキーを描きたくて仕方がないから頂度五月場所。両国国技館へゆく。マス席に足も腰もたまらないけれど、生きた江戸体感だった。やはり迫力あった。帰りがけの「ちゃんこ」。ヘルシーで美味だった。

○あれもこれも、さあこれからしっかり…と思う時、俳句と短歌とエッセイと、三河アララギに参加して下さいました「佐藤喜仙さん」が亡くなりました。とてもとても寂しい。

○六本木、ブルーに塗られた。ブルーシアターに於て、「マ

イケル・ジャクソンに捧げるオマー・ジュ・ヒット曲とダンスを凝縮したライブ・ステージパフォーマンス、を懐かしく楽しんだ。

○「山岡鉄舟研究会」5月例会。「新撰組のふるさと、日野を歩く」。

日野市は東京都多摩地域に位置し、甲州街道江戸から十里「日野宿」が置かれた。

新撰組の副長土方歳三、六番隊長井上源三郎の出身地。各々の記念館。本陣。ムクの古木、カヤの木。土方名字ばかりの石田寺墓所にびっくり。行く道の「大山蓮華」のやや下向き、限らない透明感の白い花。忘れない。

多摩モノレールより見渡す、網の目のように巡らされる用水での農業。新築の家々。高幡不動尊金剛寺、不動明王像。しっかりお参りした。

○退職後、趣味の菜園で育くんた「キユーレッドラベンダー」を山盛り送って下さった。

ベッドの脇に全部広げ、それより香りを楽しんでいるうち眠ってしまふ。このことは、本当にありがたかった。

○絵を描く友人、「ちよつとイギリスへ行つてくる」と出掛けて五十日。

「イギリス旅日記、ばーばのゆかいな50日」小川芳子著・大森郁子絵と本になった。この本の挿絵の部分を担当し、絵も抜群に上手になり…。

何と素晴らしい時を過ごされたことでしょう。とてもとても素晴らしい本です。お貸し致します。お申し出下さい。

和菓子街道 (93)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(16)

引き続き、松阪。前回紹介した伊賀屋でさわ餅に出会って以来、さわ餅が気になって仕方がなかった。何せ、松阪に来て初めてであった餅菓子だったから。その後、三重県内でさわ餅行脚をすることになるのだが、松阪市内にはさわ餅を作っている店が何軒もあり、この辺りではごく当たり前の菓子のようだ。伊勢街道沿いにある創業明治25年の山作も、そんな店の一軒だ。

赤飯が名物という山作は、店内でさわ餅を食べることができる甘味の店だが、もともとは弁当屋だったようだ。こちらのさわ餅は、他の店のさわ餅に比べるとおデブだ。でっぷりと肥えて見えるのは、餡子がたっぷり入っているから。その上、餅分もしっかりしており、ひとつで大変な満腹感を覚える。食べ終わって気づいたのだが、「特選紅白弁



当」なるメニューもあった。白いご飯と赤飯を入れた「紅白弁当」にさわ餅がついたもの。うむむ…次回はこれを食べるために、もう少しお腹を減らしてこなければ。

餡がぎっしりで、ちょっとおデブなさわ餅

◆山作

住所：三重県松阪市中町1857

電話：0598-26-6364

お知らせ

▽八月号の原稿は、七月一日(火)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

▽七月号をお届けします。

吹く風は、とても爽やかに感じられます。庭の楓の若葉のみどり、草花のいろいろを、見ていると疲れもとれる気がします。森林浴が体によいと言われますが、緑の持つ力に癒やしの効果があるのでしよう。

野に出れば、田植系の季節で、水が張られた田が続き美しい田んぼの風景が広がります。休耕田には、小麦が色付きさらさらと風になびいています。

この良い季節に集中力を高め、心を込めて作歌に励みましょう。

(山口)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができます。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年六月二十五日印刷 第六十一巻 第七号
平成二十六年七月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会
三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二
東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yur188@cronos.oon.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

URL

印刷所

株式会社 核 創 美